

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	藤本 透子
論文題目	カザフスタンにおける儀礼の再活性化の人類学的研究		
(論文内容の要旨)			
本学位申請論文は、現代における宗教復興現象のひとつとして、旧ソ連領中央アジアのカザフスタンを対象に、宗教的儀礼の再活性化が地域社会に生きる人々にとってもつ意味を明らかにするものである。近代化は世俗化政策をしばしばともない、特に社会主義に基づく近代化は民族融合と無神論のもとでの反宗教的政策を推進した。しかし、ポスト社会主義をとる諸地域では、民族文化や歴史の見直しとともに宗教復興が広範にみられる。この現象は一定の共通性をもちながらも多様な展開を示し、儀礼の再活性化の実情は、地域ごとの社会・文化的動態を明確に物語ることが多い。そこで、本論文では、とくに儀礼の再活性化の歴史性、生と死をめぐる儀礼の再活性化、社会再編過程における儀礼の再活性化が担う意味に着目した。 本論文は、3部構成をとる。第Ⅰ部「カザフ人たちの儀礼実践の歴史的展開」では、儀礼の再活性化の歴史性に焦点を当てた。まず、第1章「カザフスタンとその歴史的背景」では、イスラームの浸透時期が遅いカザフスタンにおいて、ソ連成立以前には「祖先信仰」やシャマニズムの特徴を残す儀礼が行われ、父系クランが政治的・社会的集合単位として重要性をもっていたことを示した。第2章「ソビエト時代における儀礼実践の多様性」では、カザフ人における社会主義経験と儀礼実践の多様性を明らかにした。たとえば、集団化政策に伴う強制的定住化によって成立したカザフ人村落では、父系クランの系譜や「祖先の土地」が記憶され、大規模な儀礼を除く多くの儀礼が公然の秘密として存続する一方、多民族都市アルマトゥのカザフ人の間では、儀礼は社会主義イデオロギーに反するとして断絶された。 第Ⅱ部「生と死をめぐる儀礼の再活性化」では、イスラームとカザフ文化の交錯する、生と死という人間存在の根本に関わる儀礼に焦点をあて、ポスト・ソビエト時代における儀礼の再活性化を明らかにした。第3章「子どもの誕生と成長をめぐる儀礼」では、6つの儀礼のなかで、特に生後40日の儀礼と割礼・割礼祝が再解釈を経て重要視されるようになったことを指摘した。また、儀礼再活性化の動機は、社会主義経験を反映して相違し、カザフ人村落では継続してきた儀礼の再評価であるのに対し、多民族都市のカザフ人にとっては「伝統」を改めて選び取る意味をもつことが示された。第4章「死をめぐる儀礼」では、儀礼の再活性化は多民族都市とカザフ人村落のいずれにおいても、死者の霊魂アルワクの概念を背景とするものであることが明らかにされた。また、死者が満ち足りなければ生者は豊かになれないという観念のもと、死者のためのクルアーン朗唱（死者供養）が規定の1年忌を終えた後も繰り返されるだけでなく、犠牲祭や断食月などでも大規模に行われてい			

ることが示された。さらに、「正しい」イスラーム実践をめぐる議論を呼びながらも、教義に基づく断食や礼拝の増加以上に、死者供養が再活性化していることが指摘された。

第Ⅲ部「ポスト・ソビエト時代の社会再編と儀礼の再活性化」では、村落社会に焦点をあてて、社会再編の過程における儀礼の再活性化が担う意味を明らかにした。第5章「村落社会の再編と『祖先の土地』」では、民営化によって父系クランへの帰属が経済活動の基盤となるのでもなく、「祖先の土地」の多くも経済的重要性を失っているにもかかわらず、集団化以前の墓地や系譜がルーツとして焦点化されていることが示された。第6章「カザフ人村落における祝祭の動態」では、ソビエト時代からのロシアの祭も継続される一方で、中央アジアの新年ナウルズやイスラーム祭日が「カザフの祝」と認識されて再活性化していることが明らかにされた。しかも、断食月や犠牲祭というイスラーム祭日が死者供養中心に行われ、ソフホーズ解散後の相互扶助関係の結節点であるとともに供養対象をとおした出自意識の確認の場となることが明らかにされる。さらに、第7章「大規模な供養アスの展開」では、ソ連成立以前には有力者の1年忌であったアスが、カザフ人村落において社会再編の中で富を獲得しえた人々が中心となって復興され、都市への移住者をも巻き込み、系譜意識と結びついた地域史とカザフ民族史を再認識し、父系クラン、地域、民族への帰属の表出の場となることが明らかにされた。

終章では、結論として以下の点が指摘された。第1に、社会主義的近代化は、カザフの父系クランを基盤とした遊牧経済と社会関係を変容させたが、宗教的観念を社会主義イデオロギーへと変容させることはできなかったことである。第2に、儀礼の再活性化に死生観が強く反映され、死者供養が宗教復興の中心となる点は、中央アジアのテュルク系ムスリムの中でもカザフ人に特徴的であることである。第3に、アルワクの観念に基づく諸儀礼が、ルーツとしての系譜意識の高まりの中で、彼らのアイデンティティの中核を担っていることである。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、旧ソ連領中央アジアのカザフスタン共和国における延べ48ヶ月間におよぶフィールド調査に基づき、宗教儀礼の再活性化がポスト・ソビエト時代を生きるカザフ人にとってもつ意味を人類学的視点から実証的に明らかにした研究である。ポスト・ソビエト時代における宗教復興の問題は、ソビエト連邦の崩壊をめぐる文化・社会動態の解明という重要な課題の一つであり、エスニシティやナショナリズム、あるいは社会再編という視点からその意味を問う研究が進められ、宗教復興はそれまでの「ソビエト人」に代わる帰属意識の再構築と深く関わること、相互扶助の社会的ネットワークの結節点となることなどが明らかにされてきた。これに対し、本論文は、社会主義による近代化を経験した後に、民族文化として何を選択的に取りだそうとするのかという点で、宗教再活性化の具体的な様相には民族によって大きな違いがあるのをふまえ、宗教儀礼がカザフ文化の連続性のもとに再活性化されることを実証的に明らかにした点に特徴がある。

以下、本論文の評価すべき点は大きく3つにまとめることができる。

第1に、調査対象であるバヤナウル村やアルマトウ市の人々との深い信頼関係の構築と、ロシア語、カザフ語を駆使した良質な参与観察にもとづいて、豊富な一次資料を収集した点である。これにより、本論文はポスト・ソビエトの現状をカザフ人の事例をとおして伝える良質な民族誌ともなっている。また、第5章で明らかにしたソ連成立以前のカザフ人社会における部族の移住と牧地については、ロシア統治が確立する以前の移住の話のためロシア側の資料もあまりなく、これを聞き取りで明らかにした点は、人類学研究への貢献だけではなく、歴史研究からみても、とても貴重なものである。

第2に、カザフ人の儀礼実践のロシア帝国期、ソ連期、ポスト・ソビエト期という歴史的展開、社会主義経験と儀礼実践の地域的多様性を明らかにした点である。これにより、現在のカザフ人社会にみる宗教儀礼の再活性化は、中央アジアの新年ナウルズやイスラーム祭日が「カザフの祝い」として再活性化される一方、ソ連成立以前からのカザフ文化の連続性を基盤としていることを明らかにした。このことは、カザフ人における宗教再活性化の核心が、カザフ人特有の死者の靈魂の概念を基盤とする、死者のためのクルアーン朗誦という死者供養にあり、イスラーム復興というよりも、むしろカザフ文化に特徴的な宗教性にあるという、カザフ人の宗教性についての独創的な理解を提示するものである。

第3に、ポスト・ソビエト時代における社会再編の過程で、ソ連成立以前のカザフ人の遊牧生活において政治的、社会経済的に重要な意味をもっていた出自にもとづく父系クランという集団意識や「祖先の土地」が、経済的重要性をもちえなくなった代わりに、アイデンティティの拠り所として重要な意味をもつことを明らかにした点である。まず、父系クランや「祖先の土地」は、墓地や系譜という点で焦点

化され、死者供養の場における供養対象をとおして確認されるというように、死者供養がカザフ人の系譜意識と結びつき、集団的帰属意識を涵養するものとなっていることを実証的に明らかにした。また、ソ連成立以前に行われていた一年忌アスは、ポスト・ソビエト時代の社会再編の中で富を獲得しえた人々が中心となって、文脈が変容されながら大規模な供養アスとして実践され、父系クラン、地域、民族のアイデンティティの表出の場となることを明らかにした。このように、カザフ人の父系クランや「祖先の土地」は、経済活動が変容した今日、その実質的意味はもたない代わりに、カザフ性の拠り所となる精神的支柱として重要な意味をもち続けることが明らかにされた。

本論文は、もう一つの近代である社会主義経験を通り越しながら、儀礼を再活性化することがもつ本当の意味は何かという根源的問いかけという点については、十分には考察されておらず、今後の課題として残されたといえよう。しかし、ここで明らかにされた点は、宗教儀礼の再活性化がカザフ文化の再構築過程であることを示すものであり、グローバル化が進む現代にあってなおもローカルな文化が必要とされるという、文化のもつ根源的問題を浮かび上がらせるもので、文化人類学の研究として高く評価できる。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値のあるものと認める。また、平成21年12月3日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降